生き抜いた命がつくる街
ーヒロシマで見つけた希望ー

東京学芸大学附属小金井中学校　１年　佐藤（さとう）　十希継（ときつぐ）

初めて広島の街を訪れた時、「とても新しくてきれいで、活気のある街だ！」と感じた。にぎやかな商店街が幾つもあり、大きなビルが立ち並んでいる。路面電車やバスが縦横無尽に駆け回っていて、想像以上の大都会だった。こんなに栄えている街が、かつて原爆によって焼け野原になっていたとは信じられなかった。

しかし、原爆の面影はこの街の至る所にあったのだ。原爆ドーム、被爆路面電車、被爆樹木、焼け残った建物。私はその全てに目を奪われた。

初日、私は資料館で被爆した路面電車の写真を見た。屋根が吹き飛び全く動きそうにない。しかし、その路面電車の路線は、広島の人によって何と三日で復旧し、傷ついた人々を乗せてまた広島の街を走ったという。現在も走っている被爆路面電車を偶然見ることができたのだが、その姿に広島を復興した人々の力強さを感じた。原爆を生き抜いた物たちも、この街を作り出している一部なのだと気付き心が弾んだ。

二日目に、NPO 法人の ANT-Hiroshima の方の案内で被爆樹木のフィールドワークを行った。中学校の部活で森林を守る活動をしている私にとって被爆樹木を実際に見ることは今回の目的の一つだった。

被爆樹木は広島に 159 本あるそうだ。被爆樹木は、普通の焼け残った樹だと思っていた。しかし実際見て触れてみると全く違っていた。

放射線の影響で曲がったり成長が遅くなったりしても、種や新芽をつくり、次世代に命をつなげていく。その頑張って生き抜こうとする姿に深い感銘を受けた。また 80 年前のザラザラの火傷の跡は、触れると時間の流れを感じるようで、いつまでも触っていたい気持ちになった。何事も一心に続ければ努力は必ず実るんだと、被爆樹木に教えられた気がした。

小学校の時、ウクライナ戦争が話題になり平和が失われ易いことを思い出した。この失われ易い平和をどのようにして伝え、残していくのか。唯一の被爆国に生まれた私にも何かできることはないかと考え、まずはヒロシマを訪れたい、実際に見てみたいという思いから、今回応募し参加できたことは私の一生の宝になったと思う。

今、戦争や原爆を経験したことのある人が少なくなっている中で、その悲惨さとそこから生き残った命の尊さ、そして平和への願いをまずは自分の言葉で身近な人に伝えていく事から始めたい。学校や部活、地域を通じて、被爆樹木に関わる活動を続けていきたい。

ヒロシマ平和の灯のつどいに参加して、世界中の人々が平等に、真っ白な世界地図の上でいつかきっとつながる未来が見えた気がした。きっと「一人一人の人々が思い描く平和は違っても、平和を願う気持ちは変わらない」